

よさを発揮し個性を認め尊重し合う子どもの育成に 関する教育実践研究

—コロナ禍における共同制作の活動を通して—

青木善治*・松本健義**

(令和5年1月31日受付；令和5年4月17日受理)

要 旨

互いのよさや個性を認め尊重しやすい図画工作科の学習活動の特性をいかして卒業記念の造形表現活動を実施した。その際、コロナ禍でソーシャル・ディスタンスや様々な制約が求められる現在であるが、そんな今こそ、これまでお世話になった全ての人たちや小学校に感謝しながら、子どもたちに全身で思い思いに表現でき、その作品はハレの卒業式の際に会場・体育館を飾ることとなる共同制作・ワークショップの場を設けた。そして、子どもが学びを生成していく行為や活動の論理に基づき、新たな活動状況を開発することにより、子どもがもの・こと・人との相互行為を通して、自身の行為や活動の論理と、学びを拡張する在り方について考察した。その際、図画工作科における「造形遊び」の意義をもとにして、子どもの行為と活動を通じた関係と意味の生成の視点に立った「図画工作」がどのように展開された時に、何が行われているのかを追求した。その結果、子どもがよさを発揮し個性を認め尊重する姿を明らかにすることができた。

KEY WORDS

Art and handicraft 図画工作科, Creative activities 造形活動, Collaborative production 共同制作, Workshop
ワークショップ, Interaction analysis 相互行為分析, Ethnomethodology エスノメソドロジー

1 はじめに

「新型コロナウイルス」という史上空前の感染症対策に見舞われている2022年の日本と世界。「三密」を避けながらの授業は必須となり、検温やこまめな手洗い、うがい、換気、アルコール消毒、ソーシャル・ディスタンスの確保は日常となり、学校生活は一変した。子どもたちはこれまでにないストレスを抱えながらの日常生活や学校生活を現在も余儀なくされている。筆者*は前任校において校長として子どもたちの健康と生命を守る観点から、運動会や修学旅行、児童会行事などのこれまで当たり前のよう实施方式してきた全ての教育活動や学校行事も根本から見直し、工夫・改善しながら運営してきた。ただし、このような状況下でありながらも、文部科学省『小学校学習指導要領』（平成29年告示）の前文に記されている「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」⁽¹⁾ ことに変わりはないと考えた。いやむしろコロナ禍（新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化する状態）が続いている、このような未曾有の困難を乗り越える今だからこそ、より一層子どもたちがよさを発揮し、個性を認め尊重し合う子どもの育成が最重要と考えてきた。

これまで筆者*が校長として勤務する学校において、コロナ禍でありながらも、特に図画工作科の表現及び鑑賞の学習活動を通して、互いのよさを発揮し個性を認め尊重し合う子どもの育成の具現化につなげ、成果を得ることができた。青木善治（2022）⁽²⁾ においてその成果と課題を次のように記している。「朝鑑賞の活動を通して、子どもたちは感じたままに表現することを楽しみ、お互いに認められる経験をすることができた。発言を認められる、すなわち、発言・表現した子ども自身が認められるということである。その結果、作品に対する見方のみならず、自分自身や他者に対する見方が広がり、お互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成につながった（中略）より一層、子どもたちが互いのよさや個性を認め尊重し合うことのできる環境や学習活動、教育実践を他校を含め様々な関係機関と連携しながら更に追究していきたい」⁽³⁾。その際の教育実践研究においては図画工作科の表現及び鑑賞のとりわけ対話型鑑賞（朝鑑賞）を主に活用したが、実は造形表現活動においても同様の効果を得てきている。それらは、青木（2021）⁽⁴⁾ の、造形表現活動において、互いのよさや個性を認め尊重し、子どもの自己肯定感も高めやすい効果の一助となることを示してきた。ただし、これらの成果は筆者*が校長として学校を管理運営していたことによる影響は

*滋賀大学 **学校教育学系

いなめない。

そのような折に筆者*は2021年度より滋賀大学に赴任させていただいているが、2022年4月上旬にN県T小学校の6年生学年主任（以前U小学校にて一緒に勤務）より卒業記念制作・アート活動講師依頼を受けた。T小学校においては、近年卒業生は巨大書を卒業記念に作成し、卒業式の会場・体育館に展示していたが、是非、この学年の子どもたちにはU小学校にいた際のようなアート制作を経験させてあげたいという学年主任の願いからであった。そこで、本研究においては、出前授業による図画工作科の共同制作（卒業記念制作）の学習活動を事前に現地での打合せを含め数回行いながら実施した。その結果、日ごろ筆者*が勤務していない学校においても、出前授業により子どもたちがよさを発揮し個性を認め尊重し合う子どもの姿を含め、多くの成果や図画工作科の有効性を確認することができた。以下、コロナ禍における教育実践研究を学びを捉え直す際の視点や図画工作科の教科特性や教師自身の留意点などについて述べた後に示していくことにする。

2 本研究の目的

本研究はコロナ禍でありながらも、よさを発揮し個性を認め尊重し合う子どもの育成の具現化のために、図画工作科の造形表現活動を通して、子どもが新しい意味や価値を創造しながら、新しい<私>をつくり、つくりかえ、つくり続けていく過程を明らかにする。

3 「学び」をとらえ直す視点と図画工作科の特性や教師自身の留意点について

3. 1 「学び」を捉え直す際の視点について

義務教育学校における、いじめ、不登校、暴力、対人関係の希薄化、学びからの逃走など、子どもが学び育つ過程において生じている一連の痛ましい現象は、これまで教育を成り立たせてきた枠組みを根本から問い直し、教育と社会との未来像を模索しながら大人と子どもが学び育ち合う新しい関係を創造する必要⁽⁵⁾が20年以上も前から迫られてきたことを示している。「学び」というものは個人の閉じたものではなく、他者との相互交流、相互の支え合いのなかで行われる開かれたことである。すなわち、佐伯胖（2003）が述べるように「『学び』は相互的活動」⁽⁶⁾であるといえる。したがって、本研究では「学び」を捉え直す際の視点として佐藤公治（1999）が述べるように「相互作用という場面を取り出すことによって個々人の学習や発達が他者とのかかわりの中でどう作られ、またその相互作用のかかわりが協働的な学びや集合的・社会的な変容を作り上げていっているのか、個人と集団との間で展開されている共同構築の具体的な姿をとらえていく」⁽⁷⁾ことにする。具体的には子どもたち一人ひとりが「他者」とかかわり合う中で、一体どのような相互作用・相互行為を行いながら「学び」がつくられているのか、現象学的に子どもの学びの姿のありのままをみつめていくことが重要になるといえる。

学校と子どもをめぐる様々な問題状況も、教室や学校の中で教師や子どもたちによって交わされている実際の「会話」や「行為」といった本質的なものに目を向け、学校という場を他者との学びの成り立ちの場としてもう一度捉え直すことにより、それらの問題解決の糸口を見出していくことが「主体的・対話的で深い学び」の実現においても求められているといえる。

3. 2 「主体的・対話的で深い学び」に関連して

「主体的・対話的で深い学び」に関わって、「アクティブ・ラーニング」や「カリキュラムマネジメント」が提唱されるもととなった「論点整理」には、次の「三つの柱」の資質や能力の育成が掲げられている。

- ① 何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）、
- ② 知っていること・できることを、どう使うか（思考力・判断力・表現力等）、
- ③ どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）⁽⁸⁾

①を習得して、②のように活用して、③のような人間を育んでいく。各教科の垣根を越えて、教科横断的に育んでいく。これが「三つの柱」の考え方である。そして、教師には現在も次の視点が求められている。

- i) 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。
- ii) 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。
- iii) 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。⁽⁹⁾

以上の3点から造形表現活動は、とくに「ii）他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。」の視点において、的確な教育活動となるといえる。更に図画工作科の優れた特性として次の点があげられる。

3. 3 図画工作科の教科特性について

筆者*はコロナ禍でありながらも、特に図画工作科の学習活動を通して、よさを発揮し個性を認め尊重し合う子どもの育成の具現化につなげた。では、なぜ図画工作科なのか。それは、そもそも図画工作科には、互いのよさや個性などを認め尊重し合うようにする指導に特に配慮すべき教科特性が明記されているからである。『小学校学習指導要領（平成29年告示 解説図画工作編）』の内容の取り扱いと指導上の配慮事項において、「(5)各活動において、互いのよさや個性などを認め尊重し合うようにすること」として、「学習の過程においては、友人と互いのよさや個性などを認め尊重し合うようにすることが重要である。そのためには、一人一人の児童がよさや個性などを生かして活動できるようにし、友人の作品や活動、言動に関心をもつことができるような設定をすることが大切である。児童は個人で表現していたとしても、自分と友人との関係の中で行っていることとして自覚している。個性も、周りの友人達との関係性の中で気付くものである。友人の作品や活動に目が向くようにしたり、友人との交流の場面を設定したりするなどして、児童が自分や友人のよさや個性などに気付くようにすることが大切である。そして、それを尊重し合うようにするためには、教師が日頃から一人一人の児童のよさや個性などを認め尊重することが重要である」⁽¹⁰⁾と明記されている。このように、学習指導要領において学習設定に関する留意点や教師の構えについても記されている。学習指導要領の特別活動編においても記されているが、教師の構えについて明記しているのは、筆者*がみたところ図画工作科のみである。

また更なる特性として、図画工作科の表現及び鑑賞の活動を通して、子どもたちは造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成することができることがあげられる。ここでいう造形的な見方・考え方とは、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすことである。（中略）活動や作品をつくりだすことは、自分にとっての意味や価値をつくりだすことであり、同時に、自分自身をもつくりだしていること」⁽¹¹⁾である。子どもたちは、主体的に活動や行為、作品をつくりだしながら、自分にとっての意味や価値と同時に、新しい<私>をもつくりだしているのである。また、材料や用具、作品や友だち、自己と対話しながらつくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培うことができる。さらに、表現しながら、よりよい表現方法を探ったり、新たな方法や課題、問題を発見しながら、自分の見方や感じ方を深めたりすることができる。同じ作品を友だちと一緒につくり鑑賞しても、その見方や感じ方は多様であることを実感しやすい特性がある。

他者と価値観を共有したり、異質性に気づいたりすることは他教科でも可能であるが、図画工作科ほど間口は広い。例えば、算数や理科の場合、最終的に「正解」が要求されるが、図画工作科の場合は、唯一の正解はない。ただし、その際教師が子どもの表現や見方や感じ方を肯定せず、子どもたちの有能さを認めないような子ども観であってはならない。子どもは有能さを秘めた存在なのである。したがって、次のような子ども観と教師自身の留意点が重要である。

3. 4 子ども観と教師自身の留意点について

はっきりいって<子ども>は凄い。その創造性や様々な「もの・ひと・こと」とかかわり合う力や感性は大人なんて比ではない。かつて筆者*も子どもであったのだが、いつの間にか、既成の価値観や概念で縛られ、年をとるほど大切なものを失ってきているように感じている。したがって、まだ刷り込みの少ない<子ども>を通して、既成のものの考え方や常識といったものを、今一度とらえ直す必要がある。

子どもたちの世界を丁寧にとらえ直していくことは、教師自身が子どもや学びをどのようにみているのかを不断に見直すきっかけとなる。それは、子どもと共に行為しながら、その行為によって立ち表れる意味や、それをつくりだした行為の意味を教師自身の身体を通して感じ取るようにすることである。

そもそも「作る」という言葉の表層的で狭いイメージを取り除き、ひらかれた<つくる>という行為とする意図から、昭和52年度の学習指導要領から「つくる（ひらがな）」と表記する経緯がある。しかし、今日においても図画工作科や美術が本来の意味での人間形成に深くかかわる教育として、認知されているのであろうか。図画工作科は人間本来の身体性の感覚のように総合的・統合的な在り方をめざすことに特性があり、子どもたちの今をかけがえのない存在として生きる行為としての表現を保障しているのである。

J・デューイ（1998）は、「学校と社会・子どもとカリキュラム」において次のように述べている。「すべての芸術は、身体の諸器官－眼と手、耳と声とを巻き込みはたらかせるものである。しかも、芸術は、そのような表現の器官が必要とするような、たんなる技術的技巧を超えたものである。すべての芸術は観念や思想を含み、事物に精神的な

意味を与え表現することをも含んでいるものである。しかも、芸術的観念そのものであるのかというと、それとも異なるものである。芸術は、思想と表現手段との生きた結合にはかならない。この結合を象徴的に表現するならば、この理想の学校においては、芸術作業というものは、いろいろな作業室でおこなわれている作業が、図書室および博物館という蒸留器をとおされて、再び行動になったものと考えることができる、ということになるだろう⁽¹²⁾。さらに、デューイ（1969）は、「芸術論」において「芸術は、経験の共有を局限している深淵と障壁とに充ちたこの世界において行なわれうる最上の伝達、人間と人間との間の遮るもののない完璧な伝達の唯一の媒介である⁽¹³⁾」と述べている。また、教育における芸術の重要性について、H・リード（1952）は「平和のための教育」において、次のように述べている。「教育は、藝術と切離されたときには、もう完全なものとは云えなくなる、ということである。人々が善であると考ええるひとつの生き方がある。藝術と呼ばれる創造的な活動は、そのような生き方にとっては必須なものである。教育とはこのような生活の方法に子供を導いていくことにかならない。そのような教育法は藝術の實行を通してのみうまく行くものだ、われわれは信じる。藝術とは、言葉をかえて云えば、ひとつの教育の方法のことである。それは教えられるべき教科ではない。むしろなにか、すべての教科の教育方法だとみるべきである。藝術の教育的役割をこんなふうに見ることは、べつだん事新しいものではない。われわれは、二千四百年も前にプラトンがのべた理想を、新しい云い方で述べているに過ぎない⁽¹⁴⁾。さらに、リード（1956）は、「芸術の草の根」において、「芸術は道徳上の諸価値に従属するものではないし、またかつて従属したこともなかった。道徳の価値は社会的な価値であり、芸術の価値は人間的な価値なのである。道徳の価値はある特定の生き方を促進させ庇護するものだが、芸術の価値は一つの生命の原理となって生そのものを促進させ庇護するものなのだ⁽¹⁵⁾」と述べている。デューイやリードが共通して述べていることは、教育における芸術の重要性である。図画工作科は人間本来の身体性の感覚のように総合的・統合的な在り方をめざすことに特性があり、子どもたちの今をかけがえのない＜私＞として生きる行為としての表現を保障している。では、実際にどのような造形表現活動が実践されたときにどのような子どもたちの姿をみることができたのか示していくことにする。

4 教育実践の概要

4.1 卒業記念制作事業「アート作品制作」

共同制作・ワークショップを6年生学級担任の依頼のもと実施した。

- 4.1.1 活動名：「あなたがいて わたしがいる ありがとう〇〇小学校2022」
- 4.1.2 日時・会場：2022年9月8日3限～5限（後片付け含む）、小学校体育館
- 4.1.3 参加者：6学年児童45名、学級担任2名
- 4.1.4 講師：筆者＊（青木善治）

4.2 活動のねらい

卒業記念制作事業にあたり、コロナ禍でソーシャル・ディスタンスや様々な制約が求められる昨今であるが、そんな今こそ、これまでお世話になった全ての人たちや小学校に感謝しながら、子どもたちに全身で思い思いに表現できる卒業記念制作・アート作品制作の共同制作・ワークショップの場を設けた。また、完成後は作品を卒業式会場・体育館に飾り、その作品を見ながら、これまでお世話になった全ての人への感謝の気持ちと共にかけがえのないお互いのよさや存在を再確認する機会にする。

4.3 造形表現活動の主な流れ

筆者＊は、導入時において活動名やねらいを伝えた後に、制作の大まかな流れについて次のように説明した。

- ①画材（強度に優れた住宅用資材タイベックシート）の上で、思い思いのポーズをとって横になる。（図1左）
 - ②友だちにポーズの型をマジックでなぞってもらう。すると、自分自身の分身が出現。その時、必ず隣の人と手や足等どこか身体の一部が重なるようにする。自分の名前（サイン）もマジックで書いておく。
 - ③大まかな下書きができたなら、アクリル絵具、はけ、筆、ローラー等豊富な画材や用具の中から自分で使いたいものを選んで、思い思いに全身で表現する。（図1右）
 - ④後片付け
- このような流れのもと、子どもたちは今まで経験したこともない造形表現活動を行うことになった。

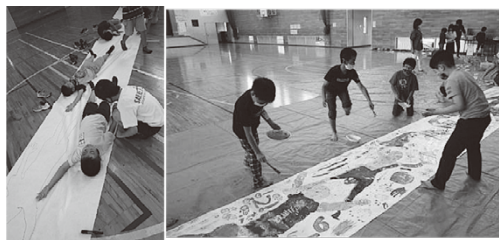


図1 ポーズの型をとり、表現する子ども

5 造形表現活動の実践

5. 1 調査方法・対象について

子どもはつくり表す行為を媒介にして友だちとかかわり合いながら、様々な新しい意味をつくりだしていく。本調査では、子どもがどのようにして友だちやものとかかわり合いながら、様々な新しい意味をつくりだしたり、新しい〈私〉をつくり、つくりかえ、つくり続けていくのか。また、子どもたちの造形表現活動における行為において、会話におけるできごとの展開と、その状況で使う表現方法や画材をつくること、またそれを使用することによって相互にどのように関係して造形表現活動のできごとを実現させていくのかを分析し、その意味を考察しながら、生きることとしての学びがどのように成り立っているのかをみていくことを目指した。調査対象は、6年生45名である。調査方法は造形表現活動における表現活動をともなう行為のひとつとまりのできごとを、事例の観察単位とし、ビデオカメラを用いた周知的・参与的な観察や活動後に子どもが記した感想記録も活用しながら、事例収集を行った。そして、その行為の意味について相互行為分析⁽¹⁶⁾やエスノメソドロジー⁽¹⁷⁾の手法を援用して考察する。



表1：トランスクリプトの表記記号

- | | | |
|---|-------|---|
| ① | () | 聞き取り不能な箇所を示す。空白の大きさは聞き取り不能な音声の相対的長さを示す。 |
| ② | (0.4) | 沈黙・間合いを示す。0.2秒毎に()に示される。0.2秒以下は()で示す。 |
| ③ | : | 音声の引き延ばしを示す。コロンの数は引き延ばしの相対的長さを示す。 |
| ④ | ↑ | 発話の音調の極端な上昇を示す。 |

5. 2 造形表現活動の事例と考察

本研究においては、2022年9月8日3・4・5限に体育館において実施した6年生の子どもたちの活動をみていくことにする。実際に次のような造形表現活動中における相互行為・発話(表2)が展開された。彩色をし始めてから20分程が経過している。

表2：a, b, c, t1(青木), t3(学校長)による相互行為・発話

	相互行為・発話	備考
01:a	左手の平に水色のアクリル絵具をつけると左手を使って自分の手形を自分の輪郭の外側の余白の部分につける	 01:a (左からb, a)
02:b	右手の平に水色のアクリル絵具をつけると右手を使って自分の手形を自分の輪郭の外側の余白の部分につける	
03:t3	近づいてきて「よっしゃ(,)はいチーズ(,)カチャ」と言ってbの写真を撮る	
04:b	「やばすぎる」と自分の水色に染まった右手の平を見ながら言う	
05:t3	aの方に体の向きをかね「こっちもいくね:::」と言ってaの写真を撮る	
06:t3	「そのうち足の裏もやるね」と笑顔で言う	 13:a
07:t1	「手を使ってもいいからね:::(,)いいね:::」と近づきながら背後から言う	
08:a	黄緑色も使って手形のスタンプをする	
09:c	黄緑色のアクリル絵具を刷毛につけ振り撒くように描く	
10:a	黄緑色を刷毛につけ手形の周りを刷毛で線を描く	
11:a	立ち上がってcの振り撒くやり方を近づいて見つめる	
12:a	「いい方法」とつぶやきよとの場所に戻る	
13:a	黄緑色を刷毛につけ思い切り全体に振り撒くように描く	

aは、まず、自分の全身(作品)を赤色にローラーを使ってすべて彩色すると、次に「左手の平に水色のアクリル絵具をつけると左手を使って自分の手形を自分の輪郭の外側の余白の部分につける」[01:a](図2)姿が見られた。隣のbはaの様子を見てからその方法を取り入れた。ただし左手ではなく右手を使い、「右手の平に水色のアクリル絵具をつけると右手を使って自分の手形を自分の輪郭の外側の余白の部分につける」[02:b]姿が見られた。そこに学校長t3がa, bの方に近づいてきて、その様子をみながら「よっしゃ(,)はいチーズ(,)カチャ」[03:t3]と言ってbの写真を撮った(図3)。すると、bは「やばすぎる」[04:b]と自分の水色に染まった右手の平を見ながら言った。すかさず学校長はaの方に体の向きをかね、「こっちもいくね:::」[05:t3]と言ってaの写真を撮った(図4)。そして「そのうち足の裏もやるね」[06:t3]と笑顔で言いながら離れていく姿が見られた。a, bに背後から近づいてきた筆者*t1は、「手を使ってもいいからね:::(,)いいね:::」[07:t1](図6)と背後から伝えた。すると、aは、色を変え、「黄緑色も使って手形のスタンプをする」[08:a]姿が見られた。そして、「黄緑色を刷毛につけ手形の周りを刷毛で線を描く」[10:a]姿が見られ、表現の道具としてローラーから手形、そして刷毛を使用し、多様な表現方法を試みる姿がみられた。その時、aの左側では、cが「黄緑色のアクリル絵具を刷毛につけ振り撒くように描く」[09:c]姿が見えていた。するとaは「立ち上がってcの振り撒くやり方を近づいて見つめる」[11:a](図7)と、「いい方法」[12:a]とつぶやき(図8)再び



図2 [01:a] (左からb, a)



図3 [03:t3]



図4 [04:b]



図5 手で表現する子ども



図6 [07:t1]



図7 [11:a]



図8 [12:a]



図9 [13:a]

制作していたもとの場所に戻った。そして、aはcが表現していたように、その表現方法を取り入れて「黄緑色を刷毛につけ思い切り全体に振り撒くように描く」[13:a]姿(図9)が見られた。

まず、ここまでの場面をみていくことにする。aは、はじめは自分の全身(作品)をローラーを使って赤色で塗っていた。そして全身を塗り終えると、その周りの白い部分(まだ何も彩色していない部分)をローラーではなく、自分の手をローラーや筆代わりに使い始めた。そこには、水色の自分の手形がいくつも現れた(図5)。aの様子を隣で見ていたbも右手の平を使って一緒に手形の表現方法を取り入れてスタンプする姿が見られた。そして、a、bが自分の手を使って表現している時に、学校長t3が体育館中央部からa、bの方に近づいてきて、その様子を見ながら、「よっしゃ(,)はいチーズ(,)カチャ」[03:t3]と言ってその貴重な子どもの姿をカメラで記録し、その際「よっしゃ」と言葉に表して子どもたちの行為を認め、賞賛する学校長がいたことがわかる。すかさず学校長はaの方に体の向きをかせ、「こっちもいくね:::」[05:t3]と言ってaの写真を撮り、そして、「そのうち足の裏もやるね」[06:t3]と笑顔で言いながら離れていく姿が見られた。学校長から温かく認められた子どもたちの姿を見ることができた。続いてその直後にa、bに背後から近づいてきたt1(青木)は、その手の平を使って表現している姿をみて「手を使ってもいいからね:::(,)いいね:::」[03:t1]と背後から伝え、表現する際には、ローラーや筆以外に、もちろん、自分の体を使ってもいいことをaやbに言葉で伝えた。すると、今度は、aは色を変え、黄緑色で思いつくままに表現するaの姿がみられた。しばらくすると、そのaの左隣では、cが「黄緑色のアクリル絵具を刷毛につけ振り撒くように描く」[09:c]姿が見えていた。すると、すかさずaは手形を押すのを止めてcの方に移動し、「立ち上がってcの振り撒くやり方を見つめる」[11:a](図8)と、そのcの表現方法について、「いい方法」[12:a]とつぶやくと再び制作していたもとの場所に戻った。そして、aはcがアクリル絵具を刷毛につけ振り撒くように描くその表現方法を取り入れて実際に表現してみる姿(図9)が見られた。

これらの出来事をみていくと、このような姿は一見当たり前のことのように思われるかもしれない。しかし、子どもたちの相互行為の意味を考察していくと、その凄さがみえてくる。手形による表現方法(a→b)や全身で振り撒くように表現する方法(c→a)を男女関係なく共有し合う関係が築かれていた。これは、表現する過程において、子どもたちは同じ空間や同じ画材をもとにしてつくり合いながら、友達のアイデアのよさを察知したり、認めたり自分でも試したりしながら、自分の世界をひろげ、自分でできることや表現自体を楽しみながら、新しい<私>を培っている姿をみることができた。

また、表現方法のアイデアを真似された子どももそれを自分のよさにとらえていることがわかる。なぜなら表現方法を真似されたと言って、非難する子どもは1人もいないからである。すなわち、作品制作を通して、お互いが尊重され、行為が認められ、承認され、安心できる関係や状況もつくりだされていることがわかる。相互行為の中で互いに行いがなされる状況や相手の立場や思惑や自分の利害や心積もりなどを思いをめぐらしながら、しかも相手の行為に互いに影響され、かつ相手に影響を与えながら柔軟に生き合っていることが示されたと考える。また、子どもたちの姿を認め、賞賛しながら写真で記録する学校長の存在やこの時間と場や状況を通して、よさを発揮し個性を認め尊重しあう土壌もつくりだされていることが示された。

続いての場面(表3)をみていくことにする。aは「振り撒くように描いた後を再度ローラーで赤く色を塗り直す」[01:a]姿がみられた。その左隣のbは、「青色に塗り終えると立ち上がって見直す」[02:b]。すると、aも立ち上がり、「他の色を探しその場を離れる」[03:a]。bは、「黄緑色のアクリル絵具を手にする」[04:b]と、「黄緑色も使って頭の部分の外側から描き始める」[05:b]、その時、bの右の方で「なに描いてるんだよお前全員のやつに飛ばしてるぞ」[06:b]という声に反応しその様子を見る。数秒後に、aが、「ね:::誰か白ない」[08:a]と言いながら戻ってきた。cが「あるよ」[09:c]と言うので、aは「cの方向に向かい白色が入ったトレーを手にしにしながら戻る」[10:a]姿が見られた。その時、aはbの彩色を見ながら、「あ(,)緑:::」[12:a]と緑色を重ねて塗っているのと思わず声に出す姿が見られた。その直後、bは立ち上がりながら、「これは地球だよ」[14:b]とそばにいたaとdに言う、立ち上がって作品と距離をとって、「これは地球だよ」[15:b]と再度言う姿が見られた。すると、dは、「あ(,)そういうことに()だっけ:::」[16:d]と、その作品を見ながら言った。すかさずbは、「これ地球だよ(,)これ

今日から地球だからな」[17:b]とdに言う姿が見られた。その声を聞いたdは右隣のグループの方へ行き、「アハハひっひ」[18:d]と楽しそうに言い跳ね上がりながら嬉しそうに戻る姿が見られた。さらに、bは体育館中央部分から近づいてきたeに、「これ今日から地球だからな」[20:b]と言った。eは、そのbの作品の頭の部分を見ると、「いいねいいねいいね」[21:e]と跪きながら言う姿が見られた。bは黒マジックをaの「黒いペン欲しいんだけど」[22:a]という言葉を引きかけに手にすると、手形の部分に描き始めた。その時、t2(松本)がカメラを手にしながらbのそばに近寄ると、「あははははははは」と感心したように声をあげその様子を見つめる[24:t2]姿が見られた。bはt2のその声や視線も感じながら、黙々と描き続けた。しばらくすると、t2は「すごいな:::(,)お:::すごいな(,)天体だよそれは:::(,)すごい」[26:t2]とbに向かって言いながら写真を撮る姿が見られた。すかさずbは「そうだよ(,)俺も足型欲しいな」[27:b]

と言いながらその場を離れ、体育館中央部の材料コーナーへトレイを探しに行く姿(図10)が見られた。

ここまでの場面を見ていくことにする。この場面では、bは自分で描いた作品が、はじめは自分自身を表現していたのであろうが、頭の辺りを彩色しているうちに、あたかもそれが地球のように見えてくると、立ち上がりながら「これは地球だよ」[14:b]とaとdに言い、すかさず、立ち上がって作品と距離をとって「これは地球だよ」[15:b]と言い、「あ(,)そういうことに()だっけ:::」[16:d]と言っていたdに対して「これ地球だよ(,)これ今日から地球だからな」[17:b]と言い、さらに新たに近づいてきたeに対して、「これ今日から地球だからな」[20:b]と言う姿が見られた。このことから、作品から形や色をとらえ、描いている対象を自分自身と限定せずに自分のイメージを広げる姿をみることができた。そして、自分で表現しているものが「地球」という新しい意味や価値がつくれ、それを他者に言葉で何度も繰り返しながら伝えている姿が見られた。bから言われたa, d, eは、dは言われた直後は、「あ(,)そういうことに()だっけ:::」[16:d]と問い直すような姿が見られたが、再度bから「これ地球だよ(,)これ今日から地球だからな」[17:b]と言われると、その言葉に納得し、「アハハひっひ」[18:d]と楽しそうに言い跳ね上がりながら嬉しそうに体で表現する姿が見られた。eにおいては、瞬時に「いいねいいねいいね」[21:e]と跪きながら言う姿が見られた。また、t2がbの作品を見ながら、「すごいな:::(,)お:::すごいな(,)天体だよそれは:::(,)すごい」[26:t2]と伝えていることから天体・地球にも見えていることがわかる。子どもたちにとっては、作品の意味も制作過程や相互行為の中で、柔軟につくりかえられていることが確認できる。すなわち、自分で表現していることに対して、その可能性を限定せずに、いつも開きながらつくり、つくりかえ、つくる姿をみることができた。このように子どもたちはつくり表す行為やものや道具を媒体にして自らが考えてもいなかった意味をもつくりだしているのである。その際、他者の考えを自分自身のこだわりから拒むこともあるが、いつも拒み続けるわけではなく、状況によっては柔軟に同調しイメージを膨らませたり、納得したりしている姿を見ることができた。このことから、他者との関係は決して閉じていないことがわかる。すなわち、お互いが尊重され、行為が認められ、承認され、安心できる関係や状況もつくりだされていることが示された。子どもたちがよさを発揮し、お互いの個性を認め尊重し合う子どもの育成の契機になることが示された。

表3: a, b, c, d, e, t1(青木), t2(松本)による相互行為・発話

相互行為・発話		備考
01:a	振り撒くように描いた後を再度ローラーで赤く色を塗り直す	 01:a, 02:b (左からc, b, a)
02:b	青色に塗り終えると立ち上がって見直す	
03:a	他の色を探しその場を離れる	
04:b	黄緑色のアクリル絵具を手にする	
05:b	黄緑色も使って頭の部分の外側から描き始める	
06:b	右の方で「なに描いてるんだよお前全員のやつに飛ばしてぞ」という声に反応しその様子を見る	 05:b
07:d	刷毛を手にしながら戻ってくる	
08:a	「ね:::誰か白ない」と言いながら戻る	
09:c	「あるよ」と左側のcが言う	
10:a	cの方向に向かい白色が入ったトレイを手にしながら戻る	
11:t1	写真を撮りながら前を通り過ぎる	 21:e
12:a	「あ(,)緑:::」とbの彩色を見ながら言う	
13:a	bのそばで水色をつけたローラーを右手で持ちながら転がす	
14:b	立ち上がりながら「これは地球だよ」とaとdに言う	
15:b	「これは地球だよ」と立ち上がって作品と距離をとって再度言う	
16:d	「あ(,)そういうことに()だっけ:::」とその作品を見ながら言う	 26:t2
17:b	「これ地球だよ(,)これ今日から地球だからな」とdに言う	
18:d	右隣のグループの方へ行き「アハハひっひ」と楽しそうに言い跳ね上がりながら嬉しそうに戻る	
19:e	bの方に近づいてくる	
20:b	「これ今日から地球だからな」と近づいてきたeに言う	
21:e	そのbの作品を見ると「いいねいいねいいね」と跪きながら言う	 26:t2
22:a	「黒いペン欲しいんだけど」という声を聞く	
23:b	「それ」と指さし「もらう」と言いながら手に取ると黒色のマジックで手形の部分に描き始める	
24:t2	カメラを手にしながらbのそばに近寄ると「あははははははは」と感心したように声をあげその様子を見つめる	
25:b	黙々と描き続ける	
26:t2	「すごいな:::(,)お:::すごいな(,)天体だよそれは:::(,)すごい」とbに向かって言いながら写真を撮る	 26:t2
27:b	「そうだよ(,)俺も足型欲しいな」と言いながらその場を離れ体育館中央部へ探しに行く	
28:t2	「すごい」と言いながら写真を撮る	



図10 [28:t2]・撮影した画像

続いての場面（表4）をみていくことにする。aは、「これで足塗りたい」[01:a]と言いながらオレンジ色のアクリル絵具が入ったトレー（給食の際に使用していたお盆の廃材）を持ってくと、さっそくアクリル絵具にペットボトルに入れてある水を少し混ぜた。すると、その様子を見ていたcが、「足やる足やる」[03:c]と言いながらaの後ろを通り過ぎた。aは、水とアクリル絵具をよくかき混ぜたいので、「混ぜよ(,)なんかある(,)混ぜるやつ」[04:a]と水の入ったペットボトルを手にしながら言うと、ちょうど目の前にあった丸いローラーを手にして、「これでやるわ」[05:a]と言いながらアクリル絵具と水を混ぜ始めた。そして、aは混ぜ終わると「立ち上がって左足をアクリル絵具につける」[08:a]姿（図11）が見られた。そして、アクリル絵具がズボンにつかないように、左足をアクリル絵具につけたままズボンの裾を上げた。そのaの様子を見たcは、「うお:::俺もやる」[11:c]と言ってaに近寄ってきた。ところが、bの方が先に待っていたので、bは「次俺ね:::」[12:b]と言った。左足裏にオレンジ色のアクリル絵具

表4：a, b, c, dによる相互行為・発話










	相 互 行 為 ・ 発 話	備 考
01:a	「これで足塗りたい」と言いながらオレンジ色のアクリル絵具が入ったトレーを持ってくる	
02:a	しゃがみながらペットボトルの水を絵具に混ぜる	
03:c	「足やる足やる」と言いながらaの後ろを通り過ぎる	
04:a	「混ぜよ(,)なんかある(,)混ぜるやつ」とペットボトルを手にしながら言う	
05:a	「これでやるわ」と言いながら目の前にあった丸いローラーを手にしてアクリル絵具と水を混ぜ始める	
06:b	戻ってくると自分の右足の裏側を確認する	
07:b	マジックを手にしながら画面を見つめる	
08:a	立ち上がって左足をアクリル絵具につける	
09:b	その様子をみつめる	
10:a	左足をアクリル絵具につけたままズボンのすそをあげる	
11:c	「うお:::俺もやる」と言って近寄ってくる	
12:b	「次俺ね:::」と言う	
13:a	右足でケンケンをししながら移動し左足を押し付けスタンプする	
14:b	「うわ:::」とアクリル絵具に足をつけた瞬間に声をあげる	
15:c	bが移動してスペースができると右足を入れる	
16:a	再度左足裏にアクリル絵具をつけ再び移動する	
17:c	スペースが空くと両足を入れる	
18:c	移動して足裏でスタンプする	
19:d	近づいて足裏でスタンプする様子を見つめる	
20:d	右足をトレーに入れアクリル絵具を足裏につける	
21:a	両足を入れる	
22:a	移動して両足でスタンプする	
23:a	スタンプしたところを見直す	
24:b	「こいつら全員顔つけてあげようか」と言って黒いマジックで足裏スタンプされたところに目や口描き始める	
25:d	「いいね顔」と言う	
26:a	その様子を見つめるとマジックを探しに向かう	
27:a	マジックを左手に1本右手に2本手にしてもどる	
28:d	自分の右手にローラーでオレンジ色をつける	
29:a	bと一緒にマジックを使って描く	
30:d	右手でスタンプする	
31:d	aとbに近寄りみつめる	
32:b	立ち上がり描いたものを見ながら「宇宙飛行士」と言う	
33:c	aと一緒に足跡に描く	
34:a	「見て:::」とbに言うと言いつつ歩み寄ってくる	
35:b	「これいろんなモンスタ:::たちがいるよ」と言う	
36:a	bと一緒に再びマジックで描き始める	



図11 [08:a]



図12 [13:a] (左からc, b, a)



図13 [21:a]



図14 [24:b] が描いた顔

をたっぷりつけたaは、右足でケンケンをししながら（図12）移動し左足を作品上の手形を付けていたそばに足形を押し付けスタンプした。bはトレーが空いたので、右足を入れた瞬間に思わず「うわ:::」[14:b]と声をあげた。cは、bもいなくなりようやくトレーが空いたので、右足を入れた。そして、ついには両足を入れ、両足で足形をスタンプする姿が見られた。dも近づいてきて3人が足裏でスタンプする様子を見ると、dも右足をトレーに入れアクリル絵具をつけて、スタンプした。すると、今度はaは左足だけでなく「両足を入れる」[21:a]姿（図13）が見られた。そして、「移動して両足でスタンプする」[22:a]姿が見られた。足裏でスタンプし終わると、bは「こいつら全員顔つけてあげようか」[24:b]と言って黒いマジックでスタンプされたところに目や口を描き始めた。（図14）すると、dは「いいね顔」[25:d]と言った。そんな様子を見たaはマジックがないので、マジックを探しに行った。そしてaはマジックを左手に1本、右手に2本手にして戻ってくると、bと一緒にマジックを使って目や口を描きだした。ずっと、bは立ち上がると、描いたものを見ながら「宇宙飛行士」[32:b]と言った。そして、ついには「これいろんなモンスタ:::たちがいるよ」[35:b]と言った。そして、a, bは再びマジックを使って、目や口を手形や足跡に描き始めた。

ここまでの場面を考察すると、ともすると子どもたちは全身を使って思い切り遊んでいるかのように見えるかもしれないが、この時間からでもaが持ってきたトレーを4人で共有しあいながら、作品もつくりながらお互いの関係もつくっていることがわかる。aは、はじめ「立ち上がって左足をアクリル絵具につける」[08:a]姿（図11）が見られたが、その後、cが「スペースがあくと両足を入れる」[17:c]姿が見られた。すると、片足でスタンプして再びト

レーのところに戻ってきたaは、今度はcが行っていたようにアクリル絵具の入ったトレーに「両足を入れる」[21:a]姿が見られた。そして、両足で足形をスタンプしながら表現する姿が見られた。この場面からもお互いの存在を尊重し合いながら、新しい意味や見方や感じ方や表現方法を楽しみながら柔軟に決めていることがわかる。さらに、子どもたちはその場や状況にあわせて、何事かを描き表しながら、かけがえのないお互いの関係もつくり続けていることがわかる。自分のイメージをひろげながら自分の足裏を使って表現することを自ら決定し、主体的に表現している姿をみることができた。教師からの指示など一切ないのである。そしてお互いの信頼感や一緒に手の平や足裏にアクリル絵具を付け、表現した時の感覚を体感することを通して、身をもって共感し合っていることの喜びや一緒に表現する楽しさを体感している姿をみることができた。さらに、造形表現行為には、aが持ってきたトレーを4人で共有したり、足裏を使って表現する方法を共有したり、道具や材料や表現方法を媒体としたりして、人と人との関係を豊かにする働きの一助があることが本実践において示すことができた。もちろん、これらの背景には学校長や学級担任の先生方が、子どもたちの行為をしっかりと受け止め、寄り添い、賞賛し、認めようとする言葉がけや姿勢が体育館内いっぱいに溢れていた要因もある。

上野直樹(1999)が「相互行為の中で、ある特定の知識や道具をつくりだしたり、使うことは『自分は、あなたと同じ仲間だ』『違うコミュニティに属している』、あるいは『交流の余地がある』ということを社会的に表示しているということになるだろう」⁽¹⁸⁾と述べているが、子どもたちは制作を通してaが持ってきたオレンジ色のアクリル絵具が入ったトレーと一緒に使い、足形スタンプという表現方法をつくりだし、自分も実際に試し表現しながら仲間になる姿を見せていた。さらに、足裏でスタンプし終わると、bが「こいつら全員顔つけてあげようか」[24:b]と言って黒いマジックで手形や足裏スタンプされたところに目や口を描き始めると、dは「いいね顔」[25:d]と言った。そんな様子を見たaはマジックが手元にないので、マジックを探しに行った。すると、aはマジックを自分のものだけでなく他のメンバーの分も探し出して、左手に1本、右手に2本手にして戻ってくると、bと一緒にマジックを使ってスタンプしたところに目や口を描き加えることによって、顔のある生物という新しい意味につくりかえた。さらに、bは描いたものを見ながら「宇宙飛行士」[32:b]と言い、しばらくして「これいろんなモンスター:::たちがいるよ」[35:b]と言った。すると、a、bは再びマジックを使って、さらに描き始める姿が見られた。

この場面からも子どもたちはまさに作品と同時にお互いの関係やこれから行う行為も相互行為の中でつくりだし、認め合いながら表していることがわかる。単に仲がいいから一緒につくりあうのではなく、協働でつくり合う中で、仲のいい関係も育みながら、よさを発揮しお互いを認め尊重し合う姿がさらに示された。活動の翌日に子どもたちは次のように振り返りを記していた。一部を示す。

- ① 私がアート活動をして思ったことは、アートをしているうちにだんだん友達と仲良くなれた気がしました！そして、アートの発想がどんどん見えてきたり、こうすればいいのができる！と思えて、とても楽しかったです。そして最後には、とてもいい作品ができてとてもよかったです。最初から最後までみんなの笑顔がみれてとてもよかったです。とてもいい体験ができました！いろいろな筆を知ることができてとてもよかったです。みんなが絵の中でつながって、手や足もおせてよかったです！
- ② ぼくは、アート活動で感じたことが2つあります。1つ目は、自分の好きなように書いてそうぞうして、とても、アートって楽しいな—と思いました。2つ目は友達との関わりです。最初の自分の体の形をかくとき、一人ではできないことがたくさんあり、友達と楽しく協力できました。とても楽しい時間でした。
- ③ 初めてこんなに大きな紙に絵をかきました。最初はオレンジとピンクを混ぜて全部ぬろうと思っていたけど、やってるうちにどんどん「こうしよう！」とアイデアがうかんできて最終的にはいい意味で私が最初に想像していたのと全然違うものができました。みんなのもその人らしいアートになっていて見るのが楽しかったです。こうやって自分の好きなものや色を大きなアートにできるのはとてもすてきなことだなと思いました。とても楽しかったです。
- ④ 私はすごく楽しくて、笑いがとまりませんでした。私は絵をかくことが大好きでアート活動をやろう！といわれた時、とてもうれしかったです。はけやローラー、スプレーなどあまり使ったことのないもので、ずっとわくわくしていました。さいご、服に「手がた」をつけたらしてぐちゃぐちゃになったTシャツを家にかざっています。本当に楽しかったです。またやりたいです。
- ⑤ アート活動でいろいろな道具を使い、自分の色をぬっている時、午前は自分の絵が真っ赤で、人の形が見えなくなりました。ぞうきんなどで水気をとると元の色にもどってけっこういい作品になったなと思いました。他の人も、自分の絵を楽しそうにかいていてよかったです。最後の写真をとる時に他の作品をみることができて、みんながちがうものでできていてすごいなと思いました。卒業式にかざるといい作品ができたと思いました。
- ⑥ 私が楽しかったことは、みんなと楽しく紙に絵をかけたことです。自分の体をかたどったやつに人間の顔をかいて、自分の好きな色とかで服ぬったりしてめっちゃ楽しかったです！みんな個性豊かでおもしろかったです。そして手形やローラーなどでかざりつけをしたりしてめっちゃいい思い出になりました。みんなとつながる絵をかけて、とても楽しかったです。
- ⑦ 昨日はとても楽しかったです。特に楽しかったのは、みんなで協力して色をぬったことです。ふだんの図工では個人でやっていたので、みんなで協力してやったのはとても楽しかったです。こういう体験は人生に一度できるかできないか分からない貴重な体験だったので、めっちゃ楽しかったです。

(下線部筆者追記)

上記①②から、今回の造形表現活動・ワークショップを通して、友達と楽しく協力し、より一層友達と仲よくなれたり、上記①③から発想がどんどんうまれてきたり、上記④から笑いがとまらなかったり、お互いの服にまで表現し

合う姿（図15）があり、そのTシャツを家に飾っている子どもがいたことがわかる。また、上記③⑤⑥から、「みんなのもその人らしいアートになっていて」、「みんながちがうものができていてすごい」、「みんな個性豊かでおもしろかった」と感じている子どもがいたことがわかる。そして、上記⑤⑦から、「卒業式に飾るいい作品ができた」と思える子どもやこの経験は、「人生に一度できるかできないか分からない貴重な体験」と感じていた子どもが実際にいたことがわかる。中野民夫



図15 服に手形をつける子ども

（2001）は、「ワークショップ」について次のように述べている。「ワークショップでは、一人では思いつかなかったアイデアが出てきたり、自分だけだと抜けられなかったところから大きく踏み出せたり、グループの相互作用の中で、大きな力が生まれてくる。このような、単なる個の総和を越えた力を生み出す作用、つまり「シナジー」とか「協働作用」が生まれるのだ。また、（中略）人を励まし、力づけるエンパワメントの作用も、ワークショップでは自然に起きるのだ。」⁽¹⁹⁾と述べ、さらに「これまでの学校のように先生が一方的に生徒をある答えに導く教育ではなく、誰が教師であるかわからない、つまり、誰もが教師である『教育＝学習』の場が必要なのだ。関心を持って参加している人々こそが、最も適切な問いを持っている教師であり、魅力的な答えを生み出せる生徒である。これこそがワークショップという方法であり、その場は決して疑似空間にはならない、現実の場そのものである」⁽²⁰⁾と述べている。前述の子どもたちの姿から本実践における造形表現活動の場はワークショップと同様の意義があることを示している。表現方法は様々であり、唯一の正解はない。そして、子どもたちの様子から造形表現活動における子どものつくり・表す行為は、相互作用・協働作用・相互行為の場であることが示された。

また、これから求められる力として「社会性」に対して「社会力」というものを門脇厚司（1999）が述べている。これは「社会を作り、作った社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り変えていくために必要な資質や能力」⁽²¹⁾ということである。その改善を図る上でも、他者との多様な相互行為を促すことが必要だと述べている。その際、その重要性として「相互行為する両者の頭の中で、互いに行為がなされる状況とか相手の立場とか思惑とか、自分の利害や心積もりなど、いろいろなことを思いめぐらしながら、しかも相手の行為（出方）に互いに影響され、かつ相手に影響を与えながらされる行為の交換」⁽²²⁾をあげ、このような社会を作り、運営し、変える力としての社会力を身に付けることが重要であると主張しているが、まさに造形表現活動における、子どもたちの柔軟な世界は、新しい意味や見方や感じ方をつくりながら、相互の関係性すなわち社会力といったことをもつくり続けていることが推察される。

子どもは、造形表現活動という相互作用・協働作用、そして共同行為というよりも相互行為の中で、新しい見方や感じ方ができる新しい＜私＞を他者との関係の中でつくり、つくり変え、つくり続けている姿を示すことができた。その相互行為と共同行為について次のように述べられている。「相互行為は、問いかけるものと応じるものとが、たがいをたがいの相手とする行為であった。それはまずなによりも、人と人とのたがいに価値あるものとして認めあうということである。共同行為は、それぞれが共同の目的にむかって協力しあう行為であり、計画的な行動を可能にする。そこではたがいの関係は、目的を遂行するための手段であり、関係そのものが道具になっている。だから相互行為のなかでは、言葉はたがいのあいだを交流し、交流することで相互の結びつきを強めるが、共同行為のなかでは、言葉は手段であり、一定の関係にもとづいて、人が人を動かすのに役立つ。言葉には、そんな二つの側面がある。」⁽²³⁾と示されている。したがって、「学校の中で展開されている対話的活動、学びの中の会話には相互行為的なことばがいつも含まれているべきであることを忘れてはならない」⁽²⁴⁾と述べられているが、まさに



図16 卒業式の時に会場・体育館を飾る作品



図17 卒業証書を手にもみんなでつくった作品に見送られながら退場する卒業生



図18 紅白幕の上に飾られた作品・卒業式会場

造形表現活動中における子どもたちの行為は相互行為そのものであることを示している。

以上、6年生の造形表現活動中に前述のような姿をみることができた。一見当たり前に感じられる場面かもしれないが、造形表現活動中には、子どもたちはこの時間と空間と場を共有し合いながら、お互いに新しい意味やかたちをつくりだしていることがわかる。今井康雄（2021）は「アートの制作は、自分でも予想しなかった新たな自己の生成をもたらすような経験の機会を、制作する者に与えるのである」⁽²⁵⁾と述べているが、子どもたちは、自分でつくりだしている何事かに対してその可能性を限定せずに、いつも開きながら新しい意味や見方や感じ方、表し方をできる新しい＜私＞、新たな自己の生成をもたらす契機になることが示された。その際、他者の考えを自分自身のこだわりから受け入れないこともあるが、いつも否定するわけではなく、状況によっては同調しながら自分の世界も拓けている。他者との関係は決して閉じていないのである。すなわち、お互いに尊重され、個性を認め、行為が認められ、承認され、安心できる関係や状況もつくりだされていることが示された。これは、「主体的・対話的で深い学び」の礎になるのである。

6 終わりに

造形表現活動における相互行為を丁寧につまみ直していくと、何か作品などを「つくる」のみではなく、そのかわり合いの瞬間瞬間で、私の試み・問題・アイデア・判断・知識・解決・表現などをつくりだしている姿がみられた。このような姿は他者とかかわり合いながら展開され、やがては社会や文化をつくりだし、自分たちの生活を豊かにしていくものとなる。そもそも、子どもたち一人一人にとって必要なのは、「いま・ここ」に自分が存在することについて抱えている不安や心配を軽減すること、安心して生き、生きようとする力を子ども自らが手にするための支援をすることである。「自分にはよさがあるんだよ」といったことや互いのよさや個性を言葉だけではなく、相互のかかわり合いの中で身をもって感じていくことが何よりも大切である。そのために、人と人がかかわり合って生きていくということは快いことなのだという子どもが感じ取ることができる環境や学習活動をつくり続けていく必要がある。これがまさに教師自身に対する「評価」でもあり、教育の営みといえる。

本教育実践研究においては、出前授業による図画工作科の共同制作（卒業記念制作）の学習活動を事前に現地での打合せを含め何度も時には現地で行いながら実施した。その結果、日ごろ筆者が勤務していない学校においても、出前授業により子どもがよさを発揮し、お互いの個性を認め尊重し合う子どもの姿を含め、多くの成果や図画工作科の有効性を確認することができた。子どもたちは、単に作品をつくるためにつくっているのではなく、この作品は共に生き合いながら、みんなで一緒に絵を描いた体育館において卒業式が開催される、その卒業式のハレの時に、会場となる体育館に飾られる（図16, 17, 18）ことになる。子どもたちが生きてきた場所、巣立っていく小学校をこのように描かれたものが、その最後の学年の時にお互いによさを発揮したり、個性を認め合ったり、尊重し合ったりした、誰もが自分として生きていられるような学校であったことをより一層想起させるものとなる。そういう経験が芸術の表現自体の本質となり、この経験を力にして、また前を生きていこうとする更なる場面においても機能し、作用していく源となる。これが、リードのいう「芸術の価値は人間的な価値」⁽²⁶⁾であるといえる。芸術の価値は一つの生命の原理となり、生そのものを促進させたり、ケアしたり守ったりするものである。

造形表現活動や造形遊びは一つの生命の原理そのもののにのっとって、子どもたちが、造形活動すること自体が、芸術の価値を子どもが生きる姿として、生きることによって学ぶことを実現している。そういう意味で、教科や文化があっても子どもが強制的に学んだり、教科や文化に合わせたりすることではなく、子どもが生きることと芸術の価値がその子のものになるということが同時的で、総合的・統合的に行われることを示している。

今、一番求められているもの、それは、子どもと共に教師自身も変容し、子どもの姿から学び続けていくことである。今後は現場の学校等において、より一層、子どもたちがよさを発揮し個性を認め尊重し合うことのできる状況や学習活動を学校や大学を含めた様々な関係機関と連携しながらつくり続けることができるのか、今後の課題とする。そして、図画工作科や美術教育の有効性や可能性を更に明らかにしていきたい。

謝辞

新潟県津南町立津南小学校山岸繁校長先生、五十嵐有紀子先生、上村薫平先生ならびに6年生の皆様にご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

註

(1) 文部科学省「小学校 学習指導要領（平成29年告示）」日本文教出版株式会社，2018，p.15

- (2) 青木善治「互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成に関する教育実践研究－対話による美術朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して－」大学美術教育学会「美術教育学研究」第54号，2022，pp.1-8
- (3) 同上書，p.8
- (4) 青木善治「自己肯定感を高め，生き生きと表現する子どもの育成に関する教育実践研究－作家や美術館，保護者，教職員との連携を通して－」大学美術教育学会「美術教育学研究」第53号，2021，pp.1-8
- (5) 佐伯胖他編集委員「いま教育を問う」岩波書店，1998，p.1
- (6) 佐伯胖「『学び』を問いつづけて 授業改革の原点」小学館，2003，p.279
- (7) 佐藤公治「対話の中の学びと成長」金子書房，1999，p.17
- (8) 文部科学省，教育課程企画特別部会 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 教育課程企画特別部会「論点整理」，2014年8月26日，pp.10-11 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/index.htm（2023年1月27日アクセス）
- (9) 同上書，p.18
- (10) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編」日本文教出版株式会社，2018，p.117
- (11) 同上書，p.11
- (12) J.デューイ，市村尚久訳「学校と社会・子どもとカリキュラム」講談社，1998，p.149
- (13) J.デューイ，鈴木康司訳「芸術論－経験としての芸術－」春秋社，1969，p.114
- (14) Hリード，須郷博訳「平和のための教育」岩波書店，1952，p.135
- (15) Hリード，増野正衛訳「芸術の草の根」岩波書店，1956，pp.109-110
- (16) 西阪仰「相互行為分析という視点」金子書房，1997，p.191「人の相互行為の過程を詳細に記述することで，心と社会秩序のありようを描き出そうとするのである。」
- (17) 佐藤学「教育方法学」岩波書店，1996，p.93，エスノメソドロジーとは「カリフォルニア大学のガーフィンケルらが開拓した方法であり，特定の社会集団の内部で自明視されている判断や行動のコードを読み解き，その社会集団の日常生活を構成している文化規範と権力関係を行為者の行動や感覚に即して開示する方法である。」
- (18) 上野直樹「仕事の中での学習－状況論的アプローチ」東京大学出版会，1993，p.134
- (19) 中野民夫「ワークショップ」岩波新書，2001，p.156
- (20) 同上書，p.39
- (21) 門脇厚司「子どもの社会力」岩波新書，1999，p.61
- (22) 同上書，p.40
- (23) 前掲書(7)，p.174
- (24) 同上書，p.175
- (25) 今井康雄編「モノの経験の教育学 アート制作から人間形成論へ」東京大学出版会，2021，p.101
- (26) 前掲書(15)，p.110

Studies in practical approaches to education on the development of children who bring out their own good points and recognise and respect each other's qualities – through collaborative production activities during the COVID-19 pandemic –

Yoshiharu AOKI* · Takeyoshi MATSUMOTO**

ABSTRACT

To take advantage of the characteristics of art and handicraft lessons that encourage children to bring out their own good points and recognise and respect each other's qualities, the creative expression activities to commemorate children's graduation were implemented. In doing so, especially in the time of COVID 19 with social distancing and various restrictions, children were given the chance to create and express things for themselves over the whole of their body in appreciation of everyone involved in their school days and their elementary school. All the works of art created thorough collaborative production and workshops decorated the walls of graduation ceremony venue and a gym. Based on the logic of activities and processes of how children's learning occurs, by means of developing new activity conditions, this study investigates how children's behaviour and actions influence and enhance their learning thorough their interaction analysis of things, matters and people. At that point, with the aim of "artistic play activities" in art and handicraft lessons, the study explores what would occur in "art and handicraft" lessons and how these lessons were developed in relation with children's action and activities. The result clearly shows that children bring out their own good points and recognise and respect each other's qualities in this research.

* Shiga University ** School Education